

2019年12月

氷華集

\* 当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

墨東や昭和の残る夜なべの灯  
金風や爪の歪みし仙人図  
朝空に印章のごと月淡き  
秋澄めり海はひかりを屈折す  
秋灯やしづかに開く智恵子抄  
身に沁むや匂ひ酸っぱき加加阿の実  
恐ひもの何時も不意なり秋の蛇  
順調な加齢の診立て秋の雲  
十六夜の月が覗くや校正す  
売尽す青果の棚の糸瓜二個  
秋澄むや時の鐘打つ蔵の町  
手を浸けて四十五秒秋の水  
店の名の薄れてきたり洪団扇  
水音や植治の庭のこぼれ萩  
故郷は刈田の風のかをりのみ  
山寺の時鐘間延びず秋の暮  
稲架干しは自家用のみと仕立てけり  
秋風や猫に小さな喉仏  
赤城山の裾ひろらかや林檎熟れ

伊藤 武敏  
中嶋 文子  
渋谷 啓子  
西村みゑ子  
佐々木 成  
大石 高典  
酒井 富子  
四宮 陽一  
中島 冬子  
山口 智子  
川内 一浩  
羽鳥 正子  
南田美恵子  
城島 千鶴  
吉田多々詩  
遠藤 長代  
高橋キセ子  
長浜 利子  
宮澤 淑子

氷室集

白きものばかりを干して秋の暮  
鼻揺らしワルツを刻む象や秋  
四屯の象のダンスや秋の蝶  
市長なる襷に背広着て案山子  
秋色を纏ひて船の客となる  
まん丸がお空にゐるよ月今宵  
猿を見る秋日に影の猿めけり  
子どもには子どもの事情夏終る  
眼鏡橋ぬけて秋風吹き来たる  
ごきぶりやタイムマシンのつくり方  
新涼や飛び石濡れし苔の庭  
佐和山や秋の音して風渡る  
対岸の闇に浮きたる夜業かな  
十五夜の雲ゆつくりと遠ざかる  
秋澄むや座り心地のよきベンチ

鈴木 春菜  
川内 麻美  
川内 一浩  
中嶋 文子  
河村 純子  
山口 容子  
小島 和  
谷口 文子  
木村 静子  
山本 真也  
片山 旭山  
石原ゆき子  
宮澤 淑子  
城島 千鶴  
中井 昭雄

単調な朝の雨音震災忌	齊藤 耐
足あそびにリフトの揺れや鳥頭	高橋キセ子
秋風が新たな私呼びにくる	昌山瑠美子
三ツ星というてた秋刀魚をいただきぬ	中野 梓
翳雲伸び行く先に子の住居	佐々木 成

2019年11月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

炎天やボール散らばるネット際	中嶋 文子
秋立つや川辺に探る風の音	長瀬 朋孝
立秋や朝の光の跳ね返る	城島 千鶴
秋の昼童話からくり動き出す	木村 静子
玩具ひとつ部屋に転がる夏の果	渋谷 啓子
まだ暗きうちより蟬のせはしげに	大野千鶴子
奥秩父の白雨武州へ信州へ	伊藤 武敏
ダムとなる木地師の村や月のぼる	吉田多々詩
夕暮の沼に牧童牛冷す	佐々木 成
萬金丹臨時休業炎暑なり	西村みゑ子
叩かずに渡る石橋秋澄めり	羽鳥 正子
古希とても途中経過や秋の雲	四宮 陽一
疎開先の本家の暗さ一位の実	鴻坂 佳子
鉄塔も我が家も跨ぎ虹立てり	酒井 富子
滴りの一糸の音の乱れざる	西五辻芳子
空蟬を服に付けくる得意顔	高橋キセ子
朝顔の日に日に小さき花となり	南田美恵子
山荘の緑蔭に聴くビバルディ	植田 清子
盆の夜や寝返りを打つ子を見やり	川内 一浩

氷室集

沖へ向け千の烏賊干す蟹の村	佐々木 成
虫干の蔵ひつそりと闇の中	河村 純子
広重の峠を越えてとろろ汁	鈴木 春菜
真実は正多角体天高し	山本 真也
メロン切る孫の皿へはやや太め	田崎セイ子
海水着干すベランダの子沢山	西五辻芳子
海亀の産まれて砂の道遠し	中嶋 文子
鴉より先に食はねば庭の梨	宮原亜砂美

草鞋履きし柩の兄や夏座敷  
重版の知らせもらひぬ河童忌に  
一つ窓に一家寄りあふ遠花火  
谷地の田の日和めでたき稲の花  
悩みごと打ち明け墓の草を引く  
きつねのかみそり祠にも御柱  
夏空や目に風運ぶポプラの葉  
暮れかかる橋へ寄り来る鬼やんま  
山寺の仁王踏ん張る暑さかな  
水槽の鰓の動きも酷暑かな  
おみやげは撃たるための水鉄砲  
ピラミッド型に切り分け西瓜喰ぶ

酒井 富子  
大石 高典  
鴻坂 佳子  
中村 順次  
山中ひでの  
宮澤 淑子  
鈴木あるの  
城島 千鶴  
森 すゞ子  
栗本 一代  
吉田多々詩  
遠藤 長代

2019年10月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

子午線や明石の蛸のうすづくり  
誤字脱字多きレポートはたた神  
本水に客席濡るる夏芝居  
鉦のみの二階囃子や夕まぐれ  
抽選の玉一等の扇風機  
弟が兄を必死に泳ぎ越す  
雨雲の動くけはひのなき小暑  
雉鳩の来し梅雨晴の水たまり  
焚口の横が定位置洪団扇  
梅雨寒や眠りし母に昼灯す  
息そつと吹きかけ立たすてんとむし  
日月の石灯籠に苔の花  
まだ泣いて居たり夏帽深くして  
鳥啼いて神を宿せる夏木かな  
桃の実の香そのまま箱に閉ず  
川舟の打ち上げられて月見草  
裾濡るるも厭はずただに水を打つ  
七月やきりと森の引き締まり  
人を許せと神は言へども原爆忌

伊藤 武敏  
大石 高典  
四宮 陽一  
中島 冬子  
中嶋 文子  
佐々木 成  
益子 桂子  
酒井 富子  
大野千鶴子  
渋谷 啓子  
羽鳥 正子  
城島 千鶴  
川内 一浩  
森 すゞ子  
福地 義雄  
木村 静子  
鈴木あるの  
古川 邑秋  
友永基美子

氷室集

傘鉾や稚児の袖の緒揺れつゆく

栗本 徳子

炎熱の跡をとどめし忘れ物  
ころころと胡瓜まはして胡瓜切る  
たくさんのこと忘れても夏だから  
秋田露刈るや大空傾けて  
顔よりも大きな百合の匂ひけり  
流木と遊ぶ汀や夏の果  
薪を割る無言の汗や登り窯  
阿弗利加の毒とはこれぞ甜瓜  
青蜥蜴遁走までの刹那かな  
初夏の古物市に迷ひ込む  
やりとりの速き筆談かき氷  
手入れなき土蔵に育ち燕の子  
原爆忌祖父の秘密を吾子が知る  
黒子かと思ひしが壁蝨掌に  
旧友と話の尽きぬ鱧の膳  
木苺の摘んで摘んでと赤くなり  
有東木の山葵門外不出にて  
時々は足下を打つ団扇かな  
道ふさぐ蛇の全長動かざり

河村 純子  
鈴木 春菜  
小嶋 和  
佐々木 成  
川内 麻美  
川内 一浩  
伊藤 恵  
大石 高典  
山本 京子  
山本 真也  
宮澤 淑子  
三原真紀子  
田中 勝  
西五辻芳子  
鈴木あるの  
酒井 富子  
宮原亜砂美  
仁田 浩  
高橋キセ子

2019年9月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

梅雨晴や官庁街の土匂ふ  
きしきしと茄子の皮剥くらいてう忌  
北窓に夏日うつろひ醤油蔵  
六月や伸びきつてゐる藁の蛇  
郭公やそろそろ帰らねばならぬ  
梅雨の間の水平線や予約席  
森古るや毛虫の羽化の矢継ぎ早  
水芭蕉の沼へ続きぬ獣道  
新聞を切りぬく音の梅雨湿り  
ガス燈や小樽運河の夕薄暑  
郭公や鉄路の音の遠くより  
六月の夜のにぎはしき田んぼかな  
子燕の巢立ちを名残惜しきとも  
水溜り跳ぶか廻るか梅雨晴間  
一人より二人はさみし梅雨の入  
白川の流れゆるらか額の花

伊藤 武敏  
鴻坂 佳子  
宮澤 淑子  
渋谷 啓子  
川内 一浩  
中嶋 文子  
西村みゑ子  
佐々木 成  
高橋キセ子  
四宮 陽一  
羽鳥 正子  
酒井 富子  
南田美恵子  
中島 冬子  
西五辻芳子  
城島 千鶴

帽子取りて鳥居をくぐる涼しさよ  
麦藁の金の束めく日暮かな  
サングラスかけたる犬の巻尾かな

回峯の行者駆けゆく河鹿沢  
操らるるごとががんぼの壁伝ひ  
父の日や父亡きを子が父の役  
憂きことの多き日なれど薔薇真紅  
行きは踏み帰りは含み桜の実  
夕立の真中ぼかんとグラウンド  
餡を練るひと日卯の花腐しかな  
黄菖蒲の濠へ影なす古墳かな  
揚梅の樹の高みより土佐の海  
落城の藩主の越えし遠青嶺  
無学祖元禅師の端坐かつと夏至  
太宰忌や用水潤れて名を残す  
黒き犬大あくびする薄暑かな  
梅雨寒やデモの末尾に傘さして  
倒木をくぐりくぐりて登山かな  
鏡像の上下転ぜず夏近し  
大砲の音のありけり夏の富士  
豊作の枇杷の実鳥と分かちけり  
万緑や何処より来る滝の音  
ががんぼの追はれし部屋のどんづまり

鈴木あるの  
吉田多々詩  
大石 高典  
氷室集  
栗本 徳子  
鴻坂 佳子  
河村 純子  
朝田 玲子  
川内 麻美  
鈴木 春菜  
高橋キセ子  
宮澤 淑子  
栗本 一代  
佐々木 成  
益子 桂子  
中村 順次  
大石 高典  
小嶋 和  
野木 正博  
仁田 浩  
宮原亜砂美  
南田美恵子  
鈴木あるの  
川内 一浩

2019年8月

氷華集

\* 当月の雑詠から尾池和夫 抄出  
氷壺集

晩春の月がぼあんと海の上  
河鹿鳴く岩を祀りし修験跡  
バーボンの水割を飲む闇を呑む  
次々と幼な泣かせて祭獅子  
ほめられて稚児並びみる仏生会  
涼しさや子規庵句座の写生の図  
村人の暮しの糧に蕨生ふ  
焙炉師や常は庭師の顔を持ち  
聞きなれし声が笥抱へ来る  
薔薇に薔薇触れ薔薇園の円舞めく  
教授室見下ろす枝に鴉の巣

伊藤 武敏  
真下 章子  
四宮 陽一  
南田美恵子  
益子 桂子  
木村 静子  
佐々木 成  
中島 冬子  
酒井 富子  
高橋キセ子  
大石 高典

鍵盤の指の躍動夏来たる  
明日葉や島の古家に雨しとど  
カルデラや墓の卵の乾く風  
そのかみの河内木綿屋柿若葉  
朝月の銀鈴めきて雪解富士  
似顔絵師を見るとなく見てゐる薄暑  
角石に堪ふる城趾五月晴  
朝食は私の仕事豆の飯

中嶋 文子  
城島 千鶴  
羽鳥 正子  
宮澤 淑子  
鴻坂 佳子  
川内 一浩  
鈴木あるの  
川上 和昭

氷室集

麦秋や電車一輛絵のごとく  
餌用の蚯蚓飼ひゐる男の子  
軒下に間借りのごとき雨蛙  
方角の摺めぬ街や汗拭いて  
街分かつ河岸段丘桐の花  
父と子の声天井へ菖蒲の湯  
うちの子と決め手迎ふる初螢  
葱坊主時刻表見るランドセル  
なにはいばら咲く挿木して五年目に  
新緑や平和の鳩と広島に  
緑蔭の糺の森や鳥のこゑ  
ありなしの風に鳴る絵馬青葉闇  
朝買ひしバナナの房が夜は消え  
母の日に母と歩むや石畳  
一年生の朝のあいさつ靴揃へ  
春風や玄武洞への渡し船  
朝の光うけて蜥蜴の動かざる  
河鹿鳴き瀬音一瞬消えしとも  
たわわなる実を願ひゐる柿若葉  
人混みに気づきし葵祭かな

本多 智恵  
藤本 隆子  
中野 悦子  
真下 章子  
長浜 利子  
鴻坂 佳子  
前田 鈴子  
山中ひでの  
城島 千鶴  
田中 勝  
片山 旭星  
森 すゞ子  
小野塚佳代  
小野塚久子  
森 裕子  
塚本 郁子  
大野千鶴子  
東 俊子  
福地 義雄  
鈴木あるの

2019年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

己が掌の蒲公英の絮君が吹く  
ボレロめく仔牛の跳ねて牧開  
きゆるきゆると刻みて母へ春キャベツ  
春愁やおやつのやうに薬飲み  
朝刊の無き日の暇よ百千鳥

川内 一浩  
伊藤 武敏  
中嶋 文子  
遠藤 長代  
酒井 富子

芽柳やまだ休ませてある水車  
猪牙舟の岸と呼びあふ遅日かな  
寓居跡誰とも知れず雪柳  
朧夜やブラックホールとふ写真  
正門を飾る鳶の芽農学部  
欲張れば友とはぐるる蕨採  
つばくらめ無人駅舎を下見に来  
かぎろひの浦の奥なるチャペルかな  
春愁やひとり勤務の司書の昼  
鈍行の軋み蛙の目借時  
神木の枝の揺らぎや鳥交る  
湯の花のさらりと溶けし啄木忌  
山国に海豚の化石うららけし  
三椏を咲かせしづもる平家谷

高橋キセ子  
鴻坂 佳子  
四宮 陽一  
益子 桂子  
城島 千鶴  
南田美恵子  
渋谷 啓子  
西村 みゑ子  
羽鳥 正子  
真下 章子  
佐々木 成  
大石 高典  
長浜 利子  
木村 静子

燕来る屋根に石置く蚕の村  
画眉鳥に負けじと燕こゑを張る  
逃水を追ひ越して行くポルシェかな  
清明の水をとりこむ草木かな  
廃村に蝌蚪の舞めく水のあり  
取りあはず蒲公英に聞く道案内  
眠さうな蛙畝ごと起こしけり  
苔付けし水車が春の日をこぼす  
毛づくろひされぬ猿をり春の昼  
山野草食はれてしまふ春の闇  
土筆煮るあれほどの嵩これほどに  
藁や土のケーキに小花さし  
色鉛筆無心に遊び子どもの日  
逆打ちの遍路や金比羅宮の坂  
尼僧らの声をとめめく野蒜摘み  
花追うて天神川を五条まで  
四月馬鹿こだはりてみてパン焦がす  
折畳傘の小さし花の雨  
川に沿ふ桜並木の蛇行せり  
十返りの花や復元武家屋敷

氷室集  
佐々木 成  
長浜 利子  
山本 真也  
鈴木 春菜  
福田 将矢  
河村 純子  
高橋キセ子  
野木 正博  
大石 高典  
羽鳥 正子  
仁田 浩  
山本 京子  
中野 悦子  
牛田あや美  
朝田 玲子  
中嶋 文子  
川内 麻美  
川内 一浩  
渋谷 啓子  
城島 千鶴

2019年6月

氷華集

\* 当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

風神の袋からつぼ木の芽晴  
川港の名残の杭や葦の角  
日溜りに猫みる風の涅槃かな  
句碑の辺の裏や表や落椿  
春の草鋤き込む畑の土煙  
上枝下枝音なく揺るる涅槃の日  
別れ路のたびに迷ひて雪柳  
手枕の仮寝と思ふ寝釈迦かな  
復興の波止しろじろと涅槃西風  
トンボロや背負籠かろく磯菜摘  
レコードの針浮き沈み春深し  
土筆とは命冥加と祖母のゑむ  
午後に消ゆ比叡の山の春の雪  
水送り火の粉に神の水垂らす  
哲学の道への標雪柳  
天神に竈社のあり臥竜梅  
みちくさの子の手に余るつくしんぼ  
山壁に狼煙のごとく杉の花  
朝の陽を受けてたゆたふ石蓴かな

伊藤 武敏  
佐々木 成  
高橋キセ子  
中嶋 文子  
酒井 富子  
益子 桂子  
川内 一浩  
羽鳥 正子  
鴻坂 佳子  
宮澤 淑子  
木村 静子  
中島 冬子  
南田美恵子  
吉田多々詩  
四宮 陽一  
城島 千鶴  
遠藤 長代  
長浜 利子  
森 すゞ子

氷室集

犯人は春の鼯ぞ能舞台  
画数の多し蛙の目借時  
修二会果つ煤けし貌をふきて藝に  
曲屋の歳月負ひし土の雛  
古墳より命いただく野蒜かな  
菜の花の色濃く散りて母の家  
しろかねの岳に真向ひ剪定す  
今日おやき昨日てんぷら露の臺  
半端なき象の放尿山笑ふ  
露味噌の華ある香りかと思ふ  
着任の挨拶のごと初音あり  
けふはしも一声藪の初音かな  
遠き日の米に換はりし雛かな  
春愁や展示に子規の幾何ノート  
春雷や光向かうに幼き日  
石垣の弾痕蛙の目借時  
苗札を立てて媪の独り言つ  
三月や子の新しき靴並べ

河村 純子  
小嶌 和  
栗本 徳子  
佐々木 成  
宮原亜砂美  
鈴木 春菜  
高橋キセ子  
酒井 富子  
川内 麻美  
川内 一浩  
長浜 利子  
城島 千鶴  
前田 鈴子  
木村 静子  
栗本 一代  
山本 真也  
真下 章子  
山本 京子



茎立の力いただく朝餉かな  
倒木を遊びどころと百千鳥

渋谷 啓子  
南田美恵子

2019年5月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

薬局の待合を分け流行風邪  
地下牢は背丈の深さ春の塵  
出来立ての風の秩父よ寒の朝  
鳥獣の足跡あまた雪の寺  
薔薇の芽に名のありリリー・マルレーン  
ニン月やひびきやすくて竹の幹  
風花の乱るる荒磯実朝忌  
ニン月や疏水を濁し重機立つ  
春寒し仔牛に厚き布を着せ  
紀国へ香り十里の梅見かな  
洛北へ残雪の嶺越えにけり  
前列は実のなる木々や植木市  
道真の無念のほどよ梅の花  
ミシン踏む春のひかりを縫ひ込んで  
海風ぐに鶯は声残しゆく  
芍薬の芽のいろ雨後の土の色  
春の闇ラ・カンパネラ弾くは誰  
春の牡蠣日に日に太り締切日  
棟上げの空晴れわたり春隣

中嶋 文子  
羽鳥 正子  
伊藤 武敏  
佐々木 成  
四宮 陽一  
高橋キセ子  
鴻坂 佳子  
城島 千鶴  
渋谷 啓子  
中島 冬子  
吉田多々詩  
古川 邑秋  
鈴木あるの  
真下 章子  
西村みゑ子  
酒井 富子  
西五辻芳子  
大石 高典  
益子 桂子

氷室集

湯拭きせし馬のまつげや風光る  
竹馬の大人の高さ子の高さ  
音もなく何ごともなく椿落つ  
雪国に生きて降る雪また恐れ  
薄氷や吾児抱く母の回り道  
骨格標本小顔なるかな春近し  
鳥帰る藻畳のみがしづかなり  
ニン月やジャズに各国語の集ふ  
身体の約七割が春の水  
焙烙の文字の幼さ節分会  
うららかや眼鏡の度数うたがうて  
はじめての「ぼく」のひとこと春隣  
立春の山影かくれなく展け

朝田 玲子  
鈴木 春菜  
栗本 一代  
佐々木 成  
三原真紀子  
仁田 浩  
山本 京子  
中嶋 文子  
山本 真也  
栗本 徳子  
吉田 達哉  
鈴木さやか  
羽鳥 正子

力抜くも力のひとつ椿落つ  
焙烙になぐり書きめく厄払  
踏絵無き国や春日に牛を引く  
綾取やセーターいまだ未完成  
忘れ鎌出できし錆の雪間かな  
春疾風荒神橋を駆け抜くる  
立春の風と競ひて走りけり

中野 梓  
宮原亜砂美  
鈴木あるの  
中野 悦子  
高橋キセ子  
大石 高典  
吉田多々詩

2019年4月号

氷華集

\* 当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

寒鯉の重なり沈む水の黙  
入道のやうなる漁師冬の雷  
而して齒の痛みだす小晦日  
革命に遭ひたるゲームお正月  
寒卵茹でれば重くなりしとも  
初富士や領巾ふるごとき雲のたち  
女正月膳に若狭の笹かれひ  
玲瓏とかがよふ大河年新た  
太陽の塔によつきりと冬晴間  
松の内過ぎて音なきおもちや箱  
亡き画家の絵に力得る初暦  
七歳に七種粥を言ひ伝へ  
お降や言霊といふ力欲し  
一灯のゆるるがごとし独楽の果て  
見定めてどんど盛るを引き倒す  
読み札の姫の一枚失せてをり  
上州の風に切干し仕上がりぬ  
釣舟の舳ふ深川年暮るる  
鳥どちの見えずしんしん雪の空

高橋キセ子  
伊藤 武敏  
鴻坂 佳子  
中嶋 文子  
川内 一浩  
宮澤 淑子  
中島 冬子  
佐々木 成  
城島 千鶴  
山中ひでの  
大石 高典  
田崎セイ子  
西五辻芳子  
吉田多々詩  
羽鳥 正子  
木村 静子  
長浜 利子  
四宮 陽一  
酒井 富子

氷室集

神遊びせむと帯締め男衆  
紙を漉く吉野の水は凍らざり  
人の訃に雲のとどまる寒暮かな  
ありふれし朝にて福来雀かな  
幽閉に似し古里の雪の朝  
離陸後の余韻にゐたり齋粥  
八幡宮に松籟深し実朝忌

河村 純子  
小嶋 和  
高橋キセ子  
三原真紀子  
川竹 美樹  
朝田 玲子  
宮澤 淑子

鳳凰の雲生す空やお元日  
森昏し獣を見張る尾白鷺  
牡蠣焼や世間話も網の上  
佳日なり手編みマフラー巻いて出る  
カザルス鳥の歌聴く春の空  
笹鳴や神宮林に日の差して  
神主と僧待つならひにて四日  
冬の虹仰ぐや祈りとどけむと  
厳冬や火を恐れざる猿のみて  
若菜摘む堰の田水の光りけり  
寒雷の一度つきりや鍋煮立つ  
冬ぬくし手術の痕に掌をあてて  
冬ひと日白湯に始まり白湯に終ふ

城島 千鶴  
佐々木 成  
田崎セイ子  
吉田多々詩  
山本 京子  
森 すゞ子  
酒井 富子  
川内 一浩  
宮原亜砂美  
遠藤 長代  
鴻坂 佳子  
仁田 浩  
中井 昭雄

2019年3月号

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

磐梯の山塩効かせ冬至粥  
火事跡を喰ひ尽くすかにショベルカー  
雪吊が空へ伸び切る城址かな  
浄財箱抱へ来る僧冬木立  
雪千トン室に蓄へ酒造り  
鯉あげの売手買手や大焚火  
小春日の腹ふくよかに藁の牛  
罪なくも括られてあり冬の菊  
戒壇廻り冷たき錠にゆきあたる  
囲炉裏火に馬が顔出す夕餉かな  
海風を捉へ乾鮭うらがへす  
犬の墓従へ冴ゆる王墓かな  
冬眠の主起せしか庭掃除  
暮早し列車待つ間の椅子硬き  
愛犬に皮の雪沓老獵師  
お迎への母待つ幼ナ暮早し  
これからも良き師であらむ日記買ふ  
年の瀬の目覚まし時計午前五時  
鬼瓦黒く濡らして冬の雨

伊藤 武敏  
中嶋 文子  
佐々木 成  
鴻坂 佳子  
遠藤 長代  
城島 千鶴  
高橋キセ子  
山中ひでの  
宮澤 淑子  
西村みゑ子  
羽鳥 正子  
木村 静子  
中島 冬子  
渋谷 啓子  
大石 高典  
益子 桂子  
吉田多々詩  
真下 章子  
四宮 陽一

氷室集

気嵐や動かぬ鮭の流れゆく

宮澤 淑子

越前の広野に低く冬の雁  
囃子方去りて火鉢の尉残る  
風紋の轟きたてる冬の浜  
綿菓子に顔うづめたき小春かな  
髪置の儀式知らずに鬢ゆはれ  
お念仏立ちしまま聞く大根焚  
憧れは犬とペチカのある暮し  
ずつしりと銀杏落葉の袋数  
極月の渋のしみある指の先  
霜除の藁をついばみ雀どち  
荷車に南瓜とこども感謝祭  
ダヴィンチの絵の捨てられず古暦  
除夜の鐘生きねばならぬから生きる  
短日や菓のむこと忘れみて  
行けば行くほど雪催なれど行く  
短日や暮るる事のみ確かにて  
こはごはと抱くうさぎの鼓動音  
毎年よ寸をたがへず餅を切る  
山裾を長き貨車ゆく十二月

栗本 徳子  
河村 純子  
佐々木 成  
栗本 一代  
西五辻芳子  
城島 千鶴  
川内 麻美  
鈴木 春菜  
高橋キセ子  
羽鳥 正子  
鴻坂 佳子  
山本 京子  
小嶋 和  
森 すゞ子  
山本 真也  
川内 一浩  
荒木 昭代  
長利 子  
真下 章子

2019年2月号

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

十日干し十日の縮み吊し柿  
高台院の情念のごと冬の月  
冬三日月氷河の際に石の家  
象潟や大きくかかる冬の虹  
雨雲に帰路急かさるる吊し柿  
溶岩の崩落の跡ななかまど  
極楽の輝きと見ゆ寒夕焼  
綿虫の届かぬみ空ありにけり  
山の色は雨に変はりし鴉のこゑ  
ブータンの数珠つまぐるも暮の秋  
どんぐりの三度弾んで谷の底  
山かぶらどれをとつても違ふ貌  
紅葉且つ散る鬼太郎の港町  
講釈のやたらくはしき菊花展  
師逝くや百舌鳥の高音を一入に  
雪吊に緩みほどこす庭師かな

高橋キセ子  
伊藤 武敏  
鴻坂 佳子  
佐々木 成  
中嶋 文子  
川上 和昭  
吉田多々詩  
川内 一浩  
羽鳥 正子  
西村みゑ子  
中島 冬子  
大石 高典  
四宮 陽一  
南田美恵子  
友永基美子  
遠藤 長代

神鷄の檻に舞ひこむ落葉かな  
天守跡を掌中にして紅葉山  
連峰の山肌見ゆる寒さかな

木村 静子  
渋谷 啓子  
真下 章子

弔文の筆の途切れる寒夜かな  
火影さす神楽の笛の颯々と  
七人の小人のボスは雪女郎  
小石にて描くけんけんば夕紅葉  
稲刈りや株握る手に覚えあり  
新米は雪の香のして炊き上がる  
喪の家を風吹き抜けて木守柿  
熱爛や母も酔ひたき夜がありて  
有明の月と並走舞鶴へ  
冬ぬくし北京に来しと思はれず  
宜蘭なり冬田に水の張られあり  
新調の長靴軽し赤のまま  
冬の朝二人の卓に皿二つ  
小春日や黒板塀に醬の香  
鳩のみて波の騒ぎのなかりけり  
初氷なれど厚きを掲げ見す  
雪女郎と思ふ無言の電話切る  
塗香して写経する窓紅葉映ゆ  
蜜蜂のダンスここよと枇杷の花  
田より立ち山端にかかる冬の虹

氷室集  
佐々木 成  
栗本 徳子  
山本 真也  
川内 麻美  
野木 正博  
鴻坂 佳子  
栗本 一代  
三原真紀子  
石原ゆき子  
鈴木あるの  
小嶋 和  
古川 邑秋  
川内 一浩  
宮澤 淑子  
吉田多々詩  
高橋キセ子  
西五辻芳子  
中村 順次  
宮原亜砂美  
渋谷 啓子

2019年1月号

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

地虫鳴く昭和支へし炭坑に  
どんぐりに追ひ越されたる坂の道  
さらさらと升をあふるる今年米  
身に入むや犇めき祀る陶狐  
十あれば十の音色にひよんの笛  
尊皇の二文字の塾や露しとど  
旅の地図閉ぢて拵げて秋の空  
古里がにはかに恋し雁の空  
翡翠の朝の声あり伊豆の宿  
炉話に身をのりだして夜の深し

氷壺集  
伊藤 武敏  
中島 冬子  
高橋キセ子  
森 すゞ子  
羽鳥 正子  
川上 和昭  
益子 桂子  
佐々木 成  
城島 千鶴  
遠藤 長代

古墳よりふはりと出でし秋の蝶  
畑越しや籠の茸をひと掴み  
虫すだく真闇のさきの地藏堂  
紙袋の折目きつちり今年米  
木の実割る鴉の智慧をまのあたり  
キリマンジャロその裾野なる翳雲  
山鳩のこゑのくぐもる後の月  
秋寂ぶや秩父事件を読む札所  
北国の稲架眺むるも母はなく

四宮 陽一  
鴻坂 佳子  
宮澤 淑子  
渋谷 啓子  
木村 静子  
大石 高典  
西五辻芳子  
酒井 富子  
立石 律子

氷室集

木の実置く掌は百歳の温みにて  
黒猫が前肢縮め十三夜  
ただいまと母に戻る日天高し  
父逝きし霎時施候に  
鴨川に白き朝来て白き息  
紙飛行機追ふ少年や翳雲  
八瀬の地の切子燈籠揺らぎゆく  
台風が過ぎしころなり夕御飯  
コスモスやビオラ抱へて少女来る  
穂を撫でて粳種の株選びけり  
行く秋や五指なめらかに鶴を折る  
オブラートの厚さ気になる鴝日和  
でんと置くおぼけかぼちやを門番に  
アンパンマンのあ音の響き小鳥くる  
日暮なほ靱磨小屋に声のあり  
やや寒にやや驚きの南予かな  
ひとところ夕日離れず石露の花  
小鳥来る白きノートに子の手形  
段取りの半ばを釣瓶落しかな  
流木をダム湖に寄する野分かな

東 俊子  
三原真紀子  
河村 純子  
山本 京子  
小嶋 和  
栗本 一代  
栗本 徳子  
鈴木 春菜  
佐々木 成  
中村 順次  
吉田多々詩  
羽鳥 正子  
西五辻芳子  
鴻坂 佳子  
酒井 富子  
鈴木あるの  
高橋キセ子  
宮澤 淑子  
前田 鈴子  
古川 邑秋